

# ワイルドと日本文学

荒井良雄

## (1) 芸術至上主義

「芸術が人生を模倣する以上に、人生が芸術を模倣する」。<sup>(1)</sup> 19世紀末のイギリスで注目された芸術至上主義運動の旗手オスカー・ワイルド<sup>(2)</sup>が、対話形式の芸術論「虚言の衰退」で言った有名な逆説である。ワイルドは続けて言う。「芸術を学ぶにふさわしい学校は、人生ではなくして芸術である。人生は芸術の最善にして唯一の弟子である。人生は芸術に鏡をかかげるものだ。自然も人生に劣らず芸術の模倣だ。芸術は芸術以外の何物も表現しない」。<sup>(3)</sup>

これはシェイクスピアが『ハムレット』の3幕2場で、ハムレットが旅役者に与える言葉として書いた「芝居は、いわば自然に鏡をかかげるようなもの」<sup>(4)</sup>をひっくり返した逆説である。もつと云えば、ギリシャ<sup>(5)</sup>以来の「ミメーシス」<sup>(6)</sup>つまり写実芸術論を逆手に取った刺激的な芸術至上主義<sup>(7)</sup>の主張である。

芸術至上主義は、19世紀中頃の欧米、特にフランスのゴッテ<sup>(8)</sup>やボードレー<sup>(9)</sup>、アメリカのポー<sup>(10)</sup>、イギリスのキーツ<sup>(11)</sup>等に顕著に見られる傾向であるが、それを一時代を画する芸術運動として、徹底して推進したのはワイルドであった。

ワイルドの芸術至上主義宣言である小説『ドリアン・グレイの肖像』の「序文」<sup>(12)</sup>を読むと、ワイルドの主張する「芸術のための芸術」<sup>(13)</sup>が、さらに明確になる。「芸術家とは美しいものを作る人である。芸術を示して芸術家を隠すのが芸術の目的である。道徳的な本とか不道徳な本とかいうようなものはない。本はよく書けているか、それともよく書けてないかだ。それだけのことである。19世紀の写実主義嫌悪は鏡に映る自分の顔を見てのキャリバンの怒りである。19世紀のロマン主義嫌悪は鏡に自分の顔が映っていないためのキャリバンの怒りである。悪徳と美德が芸術家にとって芸術の素材なの

だ。あらゆる芸術はおよそ無用のものである」。<sup>(14)</sup>

こう読んでくると、ワイルドは、写実主義はもとより、「ヴィクトリアニズム」という言葉に代表される偽善的道德主義や形式主義、俗物根性、産業革命以後の機械万能主義、金権主義、功利主義といったものに対抗する主張として、芸術至上主義を持ち出してきていることがわかる。そして、ハムレットのセリフや『テンペスト』の半人半獣の醜悪な怪物キャリバン<sup>(15)</sup>を引き合いに出しているところからも、シェイクスピアを意識していることは明瞭であろう。

### (2) 自然に鏡をかかげる芸術

ワイルドの人生と芸術に、シェイクスピアが大きな影響を与えたことは、シェイクスピアと美少年俳優の関係を『ソネット集』のなかで推理した『W.H.氏の肖像』<sup>(16)</sup>によく現われている。ワイルドの人生には、少年俳優に当たるアルフレッド・ダグラスがいたし、ワイルドの芸術観も『ソネット集』の独自の解釈によって形成されたと言っているように見える。「『ソネット集』は《時》に対する《美》の、《美》に対する《死》の勝利を主題とする12行の結びの句で締めくくられる」<sup>(17)</sup>と『W.H.氏の肖像』にある。「時に対する美の勝利」とは、自然界や人生のはかない美を、永続性のある芸術作品に移すことで、すべてを滅ぼす残酷な時に勝つことを言っている。「美に対する死の勝利」とは、命ある美しいものを否応無しに滅ぼしてしまう無慈悲な死の破壊力を指している。限りのある生や美を死滅させる時や死、すなわち自然や人生の美を破壊する時や死に勝つのは芸術のみだとして、ワイルドは自然や人生より芸術の優位性を主張する芸術至上主義に到達したのである。

### (3) キリスト教から自然崇拜へ

聖アウグスティヌス<sup>(18)</sup>が、597年にキリスト教をイギリスに伝えて以来、キリスト教は急速にイギリス全土に広まって、美術や歌や劇には宗教色が濃厚だった。神を称え、「神に鏡をかかげる」宗教文化の全盛時代である。そうした中世のイギリスに、「自然に鏡をかかげ」て、自然と一体になったような芸術が現われるのは、民謡の「夏は来にけり」<sup>(19)</sup> (1300年頃) からである。チョーサーの『カンタベリー物語』のプロローグや「パースの女房の話」<sup>(20)</sup>

などは、「自然に鏡をかかげた」いい実例だ。スペンサーが『妖精の女王』<sup>(21)</sup>でテムズ川の流れを歌った詩句も不滅である。シェイクスピアの『ソネット集』<sup>(22)</sup>の中では、特に第5番、第12番、第15番、第18番、第81番は、自然や人生、時や死と、芸術や美との関係をテーマにしている、ワイルドの芸術論の原点になった詩である。

1725年頃<sup>(23)</sup>になると、衰退の一途をたどったキリスト教信仰に代わって、イギリスでは自然崇拜が盛んになった。トマス・グレイの『エレジー』<sup>(24)</sup>、ワーズワス<sup>(25)</sup>の詩、ターナー<sup>(26)</sup>やコンスタブル<sup>(27)</sup>の絵、そしてヴィクトリア朝の社会と人間を写實的に活写したディケンズ<sup>(28)</sup>の小説等がその代表で、「自然に鏡をかかげる」芸術は全盛を極めた。そこへ登場したのが、ワイルドだったのである。

#### (4) ワイルドと日本

ワイルドの名前が初めて日本に紹介されたのは、明治16年(1883)で、ワイルドの来日中止の記事が、『ジャパン・パンチ』に漫画入りで掲載された時だった。当時ワイルドは29歳だったが、すでに悲劇『ヴェラ』<sup>(29)</sup>を書き、『詩集』<sup>(30)</sup>を出版して、文壇で注目されていたばかりでなく、独特の美的衣装とポーズと話術で社会的にも話題になっていた。そうしたワイルドの世紀末的「芸術至上主義」を風刺した歌劇『ペイシェンス』<sup>(31)</sup>が、ギルバートとサリヴァンの名コンビによって書かれ、ロンドンのサヴォイ劇場で上演されるに及んで、ワイルドは時の人となり、アメリカへ講演旅行に出かけた。その頃ちょうど日本の芸術がパリやロンドンで芸術家たちに高く評価されていたこともあって、ワイルドは日本に関心をもち、出かけてみたくなったのであろう。ワイルドの来日は実現しなかったが、日本人とその芸術について、ワイルドは『虚言の衰退』ほかで、何度も言及している。

そうしたワイルドが、芸術至上主義の色彩の濃い作品を発表するたびに、外国のものを何でも貪欲に受け入れた明治という時代の風潮もあって、彼の作品はこぞって紹介され、翻訳され、上演されて、日本に移入された。森鷗外や島村抱月や松井須磨子らによる『サロメ』の受容<sup>(32)</sup>、本間久雄の研究と評論と翻訳、中村吉蔵、谷崎潤一郎、小山内薫、日夏耿之介など、日本の文壇を代表した文学者たちの翻訳もある。<sup>(33)</sup>三島由紀夫が自ら追悼公演に選んだのは『サロメ』であったことも、鮮烈に記憶に残っている。

日本最初の『オスカー・ワイルド全集』は、大正9年（1920）に天祐社から5巻で出版された。これは坪内逍遙の個人訳『沙翁全集』の完結よりも8年早い。ワイルドの個人訳全集は、西村孝次によって昭和56年（1981）に青土社から5巻で出版され、さらに6巻本の全集が同じ出版社から、昭和から平成に移った記念すべき年に出た。ワイルド全訳者の西村孝次が会長になって、世界最初の日本ワイルド協会が設立されたのは昭和50年、ワイルドの母国アイルランドはもとより、芸術活動の本拠地であったイギリス、墓のあるフランス、何度も講演旅行に行ったアメリカなど、ワイルドの精神的風土の原点である欧米の国々よりも、日本は偏見なしに、純粹にワイルドの芸術を、自国の文化のなかに取り込んできた。そして、イギリス最高の芸術家サー・ジョン・ギールグッド<sup>(34)</sup>を名誉会長に迎えた日本ワイルド協会は、間もなく創立20周年を祝い、21世紀が始まる画期的な年には、ワイルド没後百年がやって来る。ワイルドは『獄中記』で自ら言っている。

「私は現代の芸術と文化に対して、もろもろの象徴的な関係に立っている人間だった。すでに壮年期の初めにみずからこのことを悟り、のちに現代にそれを悟らせたのだった」。<sup>(35)</sup>

#### （5）ワイルドと日本文学

ワイルドの童話、なかでも特に『幸福の王子』<sup>(36)</sup>は、翻訳で日本の児童文学として浸透している。『わがままな巨人』は、原文のままで高校の英語の教科書に採用されたこともあった。中学の英語教材に書き直されたテキストもある。ワイルドの代表作は、文庫本としても版を重ねている。このように日本でワイルドが受容されている背後には、ワイルド芸術を受け入れる伝統的な文学風土と精神構造が日本にあるからにほかならない。

明治以前には、「自然」という言葉、すなわち英語の「ネイチャー」に当たる日本語は見当たらない。<sup>(37)</sup>しかし、『万葉集』以来、日本人は生物や無生物を問わず、自分の周囲にある総てのものに近親感をいただき、山川草木、動植物、生きとし生けるものに畏敬の念を持ち、「風月を友として」、「自然」と共存し、同化して生きて来た。富士山や那智の滝に神秘性と荘厳なあらたかさを感じてきた。狐や狸や犬でさえ祭り奉り、道祖神は至るところにあった。日本の芸術は、そうした美しい日本の「自然」に「鏡をかかげて」きたのである。

『万葉集』、『古今集』、『源氏物語』、『平家物語』、『方丈記』、『花傳書』、どれもみな「自然」と人生に鏡をかかげた文学である。「鏡」や「鑑」を題名にした文学書は幾つもある。こうして一度、室町時代に純度高く完成された「鏡」の芸術<sup>(39)</sup>は、江戸時代、それも元禄期において、再び絢爛と開花する。華麗な芝居で義理人情を写した近松、単純化の極みである俳句に「自然」と人生を凝縮した芭蕉、人間の愛欲や金銭欲から男色までに「大鑑」をかかげて写実した西鶴、こうした文学伝統があったので、ワイルドの芸術至上主義は、比較的抵抗なしに日本に入って来て、定着したのである。

#### (6) 美神たちの芸術

「すべての神々は死んだ。いまや、わたしたちは超人の生まれることを願う」。これはニーチェの『ツアラトウストラはこう言った』<sup>(39)</sup>の第1部の終わりにある言葉だが、この神に代わる超人待望論は、イプセンの近代劇やフロイドの精神分析学とともに、19世紀末の欧米芸術に衝撃的な影響を与えた。ワイルドと同じアイルランド生まれの同時代人バーナード・ショーは、イプセンを取り込み、ニーチェの要望に答えて『人と超人』<sup>(40)</sup> (1903) を書いた。ワイルドは、「芸術のための芸術」を標語にかかげた芸術至上主義でもってニーチェの超人思想に答え、「芸術が人生を模倣する以上に、人生が芸術を模倣する」という逆説によって、ギリシャ神話の芸術の女神ミューズ<sup>(41)</sup>を、神の死んだ現代に復活させたのであった。

そして『獄中記』<sup>(42)</sup>では、キリストさえも芸術家であり、詩人であると見た。「キリストの真の人生と、芸術家の真の人生のあいだに、はるかに親密で直接なつながりを私は見る。キリストの位置はまことに詩人たちとともにある。とりわけ、キリストこそは個性主義者たちのなかの最高の個性主義者なのである」。<sup>(43)</sup>

日本には、キリスト教が伝来する以前から、ワイルド流の詩神や美神に満ち満ちている。柿本人麿や山部赤人などの『万葉』の歌人たち、紀貫之や紀友則などの『古今集』の歌人たち、紫式部と清少納言、西行、鴨長明、『平家物語』など語り物の作者たち、そして世阿弥といった詩神や美神たちが、ワイルドが詩神として意識したシェイクスピアやキーツが現れる前に、あまたいるのが日本文学である。しかも、芭蕉や近松や西鶴の後で、ワイルドが移入されたのだから、日本ほどワイルド芸術と相性のいい国は、ワイルドの

生きた時代の世界には、そう多くなかったのである。

### (7) 逆説の美学

ワイルドの優れた伝記を書いたヘスキス・ピアスンが、『ワイルドの生涯』<sup>(44)</sup> (1946) で、逆説の効用を次のように説明している。「ワイルドは、ものの見方を変えることによって、私達が意外な角度から人生を見るようにさせて、真実の領域を拡大してくれる」。

ワイルドは『虚言の衰退』で、「芸術が人生を模倣する以上に、人生が芸術を模倣する」という逆説的芸術観を提示し、「最後の啓示は、虚言、つまり美しい虚偽を語ることが、芸術の主要な目的なのだ」<sup>(45)</sup> と言って、シェイクスピアのような、フォルスタッフのような、自由奔放な創造力と芸術的な虚言の復活を熱望した。そして『獄中記』では、「浅薄こそ最大の悪徳なのだ。自覚されたものはすべて正しい」<sup>(46)</sup> という悟りを繰り返し、「芸術家というものは、芸術そのものと同じく、その本質自体において、無用のものなのである」<sup>(47)</sup> という『ドリアン・グレイの肖像』の序文の結びを、再度提示した。

こうしたワイルドの逆説的な芸術観は、荘子の「無用の用」、般若心経の「色即是空、空即是色」、芭蕉の俳諧論「高く心を悟って俗に帰る」、「深きより浅きに案ずるのがよろしい」<sup>(48)</sup> といった逆説的な思想に一脈通じるものがある。また仏教思想や禅を引き合いに出すまでもなく、極めて東洋的でもある。鈴木大拙は『禅と日本文化』(岩波新書)で、「禅はどうしても芸術と結びついて、道徳とは結びつかぬ。禅は無道徳であつても、無芸術ではありえない」<sup>(49)</sup> と言っているが、これなどもワイルドの芸術論の根幹の部分につながる思想であつて、ワイルドの日本における受容とも深くかかわってくる。

最後に、「自覚されたものはすべて正しい」というワイルドの悟りは、アレグザンダー・ポープの『人間論』に何度も現れる1行「この世にあるものは、すべて正しい」<sup>(50)</sup> を、ワイルド流に言い換えた名言である。森羅万象、この世にあるものは、なるほど、みんな正しい。だが自然にただ漠然と鏡をかがけているだけでは、まことに主体性がないし、何も見えて来ない。デカルトの「われ思う、ゆえに我あり」<sup>(51)</sup> をもじって、ケネス・クラークは『芸術と文明』(1969)で、「われ感ず、ゆえに我あり」<sup>(52)</sup> を、自然や人生に対する芸術家の根本的な態度として持ち出している。

ワイルドは、芸術家の感性と知性によって、主体的に自覚され、創造されたものは、すべて正しく、美神の芸術が、自然と人生の美しさを、私達に逆に悟らせてくれるのだと主張しているのである。

ワイルドの芸術至上主義の原点となった一人ジョン・キーツが言ったように、「美しいものは永遠の喜びなのである」。<sup>(53)</sup>

## (8) ワイルドと現代

近代化、組織化、機械化、コンピューター化の道を進んで来た世界の中の日本で、それもとくに大都会に住んでいると、自然破壊と環境汚染に悩まされた管理社会の中で、自然との触れ合いや、美的感動を失い、したがって心身の健康を害し、とりわけ心の安らぎを感じる時が非常に少ない。

そうした現代に生きる私達にとって、辻邦生が『美神との饗宴の森で』<sup>(54)</sup>の中で書いている次のような啓示的な悟りの文章は、心の支えであり、救いである。

「ようやく、美の中に身を置いていれば、全宇宙が崩壊しても、さして周章てることはないだろうという境地を予感するようになった。私はあくせくと何かに追い立てられるように外国に出かけたり、本をむさぼり読んだりすることはなくなった。とくにわざわざメロディを喚び起こす形象を追い求めなくてもいいような気持ちになってきた。すべて与えられている風土、季節、時間、人々だけで十分ではないか、という気がした。本当は、この地上に生まれたとき、何もかも与えられ、美に十分恵まれていたのではないか—あるときそんな声を聞いたような気がした。私は肩の力が取れ、のびのびと息ができるようになった」。

この文章は、私たちが心の安らぎを、自然との触れ合いと、美神の芸術作品との出会いに求めるのも、人間の英知のひとつだということを、私達に想起させてくれる。そしてワイルドの逆説的な芸術論も、そのことを改めて私たちに気付かせてくれるのである。

[付記] この原稿は、平成3年7月6日、東京都八王子市の大学セミナーハウスに於ける日本ワイルド協会夏期セミナーでおこなった講演「ワイルドとシェイクスピア」(『ドリアン・グレイの肖像』を中心に)と、平成5年11月21日、駒澤大学中央講堂に於ける駒澤大学国文学大会での講演「ワイルドと日本文

学」をもとにして作成いたしました。

講演の機会を与えてくださった日本ワイルド協会と駒澤大学国文学会に感謝致します。

#### NOTES

- (1) "Life imitates art far more than art imitates life" (THE DECAY OF LYING, p.982). The quotations in this article are from COMPLETE WORKS OF OSCAR WILDE, Latest reprint, Collins, 1973. 訳文は『オスカー・ワイルド全集』全6巻(西村孝次訳, 青土社, 1989) 参照。
- (2) Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde was born in Dublin on 16th October 1854. He was the second son of Dr. William (afterwards Sir William) Wilde (1815-1876). His mother was Jane Francesca Speranza Elgee (1826-1896). Oscar died on 30th November 1900 at Hotel d'Alsace, 13 Rue des Beaux Arts, in Paris.
- (3) "The proper school to learn art in is not life but Art" (ibid., p.980). "Life is Art's best, Art's only pupil" (ibid., p.983). "Life holds the mirror up to Art" (ibid., p.985). "Nature, no less than life, is an imitation of Art" (ibid., p.985). "Art never expresses anything but itself" (ibid., p.926).
- (4) "...the purpose of playing, whose end, both at the first and now, was and is to hold, as 'twere, the mirror up to nature" (HAMLET, Act III, Scene 2, 11.21-24). The quotations from Shakespeare are taken from THE COMPLETE WORKS OF SHAKESPEARE, widely known as THE ALEXANDER TEXT (Collins, first published in 1951).
- (5) "Comedy, as we said, is an imitation of men worse than the average, not indeed as regards any and every sort of vice, but only as regards the Ridiculous, which is a species of the Ugly. ...Tragedy is an imitation not of persons but of action and life, of happiness and misery" (Aristotle's POETICS, translated by John Warrington, Everyman's Library 901, published in 1963), p.10 and p.13.
- (6) 『ミメーシス』(ヨーロッパ文学における現実描写), E. アウエルバッハ著, 篠田一士・川村二郎訳, 筑摩叢書75, 1967).
- (7) 『唯美主義』(AESTHETICISM), R. V. ジョンソン著, 中沼了訳, 研究社, 1971年。
- (8) Theophile Gautier (1811-1872), French poet and novelist. His works include EMAUX ET CAMEES (1852) and MADEMOISELLE DE MAUPIN (1835).
- (9) Charles Baudelaire (1821-1867), French poet, noted for the author of LES FLEURS DU MAL (1857).
- (10) Edgar Allan Poe (1809-1849), famous American poet and short story writer.
- (11) John Keats (1795-1821), British poet. The following lines are very well known. 'Beauty is truth, truth beauty,' — that is all / Ye know on earth, and all ye need to know" (ODE ON A GRECIAN URN).
- (12) The Preface to THE PICTURE OF DORIAN GRAY (1890).
- (13) Art for Art's sake. (cf. Art for Life's sake 「人生のための芸術」)
- (14) "The artist is the creator of beautiful things. To reveal art and conceal the artist is art's aim.



...There is no such thing as a moral or an immoral book. Books are well written, or badly written. That is all. The nineteenth century dislike of realism is the rage of Caliban seeing his own face in a glass. ...Vice and Virtue are to the artist materials for an art. ...All art is quite useless" (The Preface to THE PICTURE OF DORIAN GRAY, P.17).

- (15) Caliban is a savage and deformed slave in THE TEMPEST.
- (16) THE PORTRAIT OF MR. W. H. (1889).
- (17) "...the Sonnets conclude with an envoi of twelve lines whose motive is the triumph of Beauty over Time, and of Death over Beauty" (Ibid., p.1191).
- (18) St. Augustine (d. 604), first archbishop of Canterbury. He was sent by Pope Gregory I with forty monks to preach the Gospel in England (THE OXFORD COMPANION TO ENGLISH LITERATURE, 1969).
- (19) SUMER IS ICUMEN IN : the first line of what is believed to be the earliest existent English lyric. It was probably written in the first half of the 13th century ; the author is unknown. The music to which it was sung still survives (Ibid.).
- (20) The Prologue and THE WIFE OF BATH'S TALE from THE CANTERBURY TALES (designed about 1387) by Geoffrey Chaucer (prob. 1345-1400).
- (21) PROTHALAMION (1596) by Edmund Spenser (1552?-1599).
- (22) THE SONNETS (1609) by William Shakespeare (1564-1616). 翻訳は高松雄一訳 (岩波文庫, 1986) 参照。
- (23) Kenneth Clark's CIVILISATION (Pelican Books, 1969), p.188. 翻訳は『芸術と文明』(ケネス・クラーク著, 河野徹訳, 法政大学出版局, 1975)。
- (24) ELEGY (1751) by Thomas Gray (1716-1771).
- (25) William Wordsworth (1770-1850). cf. Tintern Abbey Lines (1798).
- (26) Joseph Mallord William Turner (1775-1851). cf. "Frosty Morning," 1813.
- (27) John Constable (1776-1837). cf. "Hay Wain," 1821.
- (28) Charles Dickens (1812-1870). cf. DAVID COPPERFIELD, Ch. 55.
- (29) VERA, or THE NIHILISTS, was published in 1880.
- (30) The first collected edition of Wilde's POEMS was published in 1881.
- (31) PATIENCE (1881) by Sir William Schwenck Gilbert (1836-1911) and Sir Arthur Seymour Sullivan (1842-1900).
- (32) 『「サロメ」の変容』(井村君江著, 新書館, 1990) 参照。
- (33) 『オスカー・ワイルド考』(平井博著, 松柏社, 1980)。「日本における OSCAR WILDE」(pp.137-212) 参照。
- (34) Sir John Gielgud (b. 1904), one of the greatest Hamlet actors in our time, played the part of John Worthing in the 1930's and 1940's in London and New York.
- (35) "I was a man who stood in symbolic relations to the art and culture of my age. I had realised this for myself at the very dawn of my manhood, and had forced my age to realise it afterwards" (DE PROFUNDIS, p.912).
- (36) THE HAPPY PRINCE AND OTHER TALES was published in 1888. THE SELFISH GIANT

was included in this collection of five fairy tales.

- (37) 『いのちとかたち』(日本美の源を探る), 山本健吉, 新潮社, 1981年。終章「造化と自然と」(pp.368-377) 参照。世阿弥の『花傳書』の序にある「この芸において, 大方七歳をもて初めとす。このころの能の稽古, かならずその者自然といたすことに, 得たる風体あるべし」の箇所「自然」は, 「ネイチャー」ではない。
- (38) 能舞台には正面に松を描いた「鏡板」があり, 橋懸の奥には能役者が姿見で登場前の身づくろいをする「鏡間」がある。
- (39) 『ツアラトウストラはこう言った』, ニーチェ著, 氷上英広訳, 岩波文庫, 1967。上巻「贈り与える徳」(p.133) 参照。
- (40) MAN AND SUPERMAN (1903) by George Bernard Shaw (1856-1950). 翻訳は市川又彦訳『人と超人』(岩波文庫, 1958) 他。
- (41) Muse : One of nine sister-goddesses, the offspring of Zeus and Mnemosyne (Memory), regarded as the inspirers of learning and the arts, esp. of poetry and music (OED).
- (42) DE PROFUNDIS was written in 1897 in Reading Prison and published in 1905.
- (43) "I see a far more intimate and immediate connection between the true life of Christ and the true life of the artist. ...Christ's place indeed is with the poets. ...And, above all, Christ is the most supreme of individualists" (Ibid., pp.922-925).
- (44) THE LIFE OF OSCAR WILDE (Methuen, 1946) by Hesketh Pearson, p.199. "By shifting the viewpoint, he forced his listners to look at life from unaccustomed angles and enlarge the boundaries of Truth."
- (45) "The final revelation is that Lying, the telling of beautiful untrue things, is the proper aim of Art" (THE DECAY OF LYING, p.992).
- (46) "The supreme vice is shallowness. Whatever is realised is right" (DE PROFUNDIS, p.874).
- (47) "...artists, like art itself, being of thier very essence quite useless" (Ibid., p.946).
- (48) 『芭蕉物語』, 麻生磯次著, 新潮社, 1975。下巻「最後の芭蕉庵」(pp.217-220) 参照。
- (49) 『禅と日本文化』, 鈴木大拙著, 北川桃雄訳, 岩波新書 (1940年初版) 1987年第47刷, 第2章「禅と美術」(p.20) 参照。
- (50) "Whatever is, is right" (AN ESSAY ON MAN, Epistle I, l.284) by Alexander Pope (1688-1744).
- (51) "I think, therefore I am" (LE DISCOURS DE LA METOOODE) by Rene Descartes (1596-1650).
- (52) "I feel therefore I am" (Kenneth Clark's CIVILISATION, p.200).
- (53) "A thing of beauty is a joy for ever" (ENDYMION, bk. 1, i. 1).
- (54) 『美神と饗宴の森で』, 辻邦生著, 新潮社, 1993。第V章「絵画との対話から」(p.255) 参照。同じ著者が引き続いて出版した『黄金の時間の滴り』(講談社, 1993) は, 美しく格調の高い文章で書かれたパロディ形式による芸術論であり, 小説論であり, しかも高度な現代の文明批評にもなっている。美的感動と知的興奮をおぼえる12編の読んで楽しい短編芸術物語である。